

ダニエル書 - 第七十一番

預言のタペストリー：エゼキエル書第八章の四つの忌むべきことと現代におけるその意義を解き明かす

Jeff Pippenger

2024-02-04

エゼキエル書第八章の四つの忌むべきことは、現代イスラエルの四世代を象徴しており、現代イスラエルの始まりは古代イスラエルの始まりによって予表されている。これら二つの始まりの歴史は、間もなく到来する日曜法において現代イスラエルが終わりを迎えることを証している。古代の文字通りのイスラエルと現代の霊的イスラエルという二つの始まりは、ユダから分離して北イスラエル王国が成立した時の初期の歴史によって証しされている。

古代イスラエルが金の子牛を造ったとき、彼らはちょうど、神が彼らを王国にするという予言の成就としてエジプトを出たばかりだった。イスラエル北王国の初代王ヤロブアムの物語には、まさに同様の特徴が見られる。ヤロブアムはソロモンの怒りを避けてエジプトに逃れた。彼は預言者アヒヤによって、十二部族のうち十部族を治める王にされるといふ預言的な約束を与えられていた。予言が成就する前、ヤロブアムはソロモンとの間に距離を置くため、ソロモンが死ぬまでエジプトに逃れていた。

そのころ、ヤロブアムがエルサレムを出て行ったとき、シロ人の預言者アヒヤが道で彼に出会った。アヒヤは新しい衣を身にまとい、二人きりで野にいた。アヒヤは自分が身に着けていたその新しい衣をつかみ、十二の切れに裂いた。彼はヤロブアムに言った。「この十切れを取りなさい。イスラエルの神、主はこう言われる。見よ、わたしはソロモンの手から王国を引き裂き、十部族をあなたに与える。（ただし、わがしもベダビデのため、またわたしがイスラエルのすべての部族のうちから選んだ都エルサレムのために、彼には一つの部族が残される。）彼らがわたしを捨て、シドン人の女神アシュタロテと、モアブの神ケモシュと、アンモンの子らの神ミルコムを拝み、わたしの道に歩まず、わたしの目にかなう正しいことを行わず、父ダビデがそうしたように、わたしの掟と定めを守らなかったからである。しかし、わたしは彼の手から全王国を取り去りはしない。わたしは、彼の命のある限りは彼を君主としておく。これは、わたしが選んだわがしもベダビデのためであり、彼がわたしの命令と掟を守ったからである。だが、わたしは彼の子の手から王国を取り、十部族をあなたに与える。また、彼の子には一つの部族を与える。これは、わたしの名を置くためにわたしが選んだ都エルサレムで、わがしもベダビデが、わたしの前にいつも灯を持つためである。」

わたしはあなたを取り上げ、あなたは心の望むところのすべてを治め、イスラエルの王となる。もしあなたが、わたしが命じるすべてのことに聞き従い、わたしの道を歩み、わたしの目に正しいことを行い、わたしのしもベダビデがしたように、わたしの掟と戒めを守るなら、わたしはあなたとともにいて、ダビデのために建てたように、あなたのためにも確かな家を建て、イスラエルをあなたに与える。このことのゆえにわたしはダビデの子孫を苦しめる。だが、いつまでもではない。それゆえソロモンはヤ

ロブアムを殺そうとした。ヤロブアムはエジプトへ逃れ、エジプトの王シシャクのもとに行き、ソロモンが死ぬまでエジプトにいた。ソロモンのその他の事績、彼の行ったすべてのこと、そしてその知恵は、ソロモンの事績の書に記されているではないか。ソロモンがエルサレムでイスラエル全体を治めた期間は四十年であった。ソロモンは先祖たちとともに眠り、その父ダビデの町に葬られた。彼の子レハブアムが代わって王となった。列王記上 11:28-43。

ソロモン王の死後、王国は分裂することになっており、ヤロブアムが北の十部族の王となり、ソロモンの子レハブアムがエルサレムで王となるはずであった。部族の分裂が起こる前に、ヤロブアムはエジプトから出て来る必要があった。

レハブアムはシェケムへ行った。彼を王にするために、全イスラエルがシェケムに集まっていたからである。さて、なおエジプトにいたネバトの子ヤロブアムがこのことを聞いた（彼はソロモン王の前から逃れて、エジプトに住んでいたのである）。そこで人々は人を遣わして彼を呼び寄せた。こうしてヤロブアムとイスラエルの全会衆が来て、レハブアムに言った。「あなたの父は私たちのくびきを重くしました。今、どうかあなたの父の過酷な務めと、私たちに負わせたその重いくびきを軽くしてください。そうしてくだされば、私たちはあなたに仕えます。」レハブアムは彼らに言った。「三日たってから、もう一度私のところに来なさい。」それで民は去って行った。列王記上 12:1-5

レハブアムがその三日間にいかに愚かに振る舞ったかという物語は、その原因を、長老たちの助言を愚かにも退けたことに帰しているが、部族の分裂はすでに預言されていたので、どのみち起こったはずである。将来の記事のためにここで記しておくべきは、その分裂の過程が具体的に三日間として示されているという点である。ミラー派の歴史において、二つの王国は再び一つの王国となる。すなわち、黙示録十四章の三天使が到来する時期に当たるミラー派の歴史の中で、北と南の部族は一つの王国となる。ミラー派の歴史におけるその三天使は、レハブアムの決断の三日間によって予表されていた。1798年から1844年に至るまで三天使が到来したその四十六年間は、また、キリストがヨハネによる福音書二章で、壊された神殿を建て直すのに必要だと述べた、象徴的な三日間でもあった。ただし、その研究の部分は今後の記事に譲る。

三日目の終わりにレハブアムが愚かな言葉を告げたとき、王国は分裂した。

イスラエルのすべての者が、王が自分たちの言うことに耳を貸さないのを見たとき、民は王に答えて言った。「われらはダビデに何の分け前があるのか。エッサイの子に受け継ぐべき嗣業もない。天幕に帰れ、イスラエルよ。今や自分の家を顧みよ、ダビデ。」こうしてイスラエルはそれぞれ天幕に帰った。しかし、ユダの町々に住んでいたイスラエルの子らの上には、レハブアムがなお王であった。そこでレハブアム王は、貢納を司るアドラムを遣わしたが、イスラエルは皆、彼を石で打ち殺した。それゆえ、レハブアム王は急いで自分の戦車に乗り、エルサレムへ逃れた。こうしてイスラエルは今日に至るまでダビデの家に背いた。やがて、イスラエルのすべての者がヤロブアムが帰って来たと聞くと、彼を遣わして呼び寄せ、会衆に呼び、彼を全イスラエルの王とした。ダビデの家に従った者は、ただユダの部族だけであった。列王記上 12章16-20節

ヤロブアムに王国が与えられるという預言は、彼がエジプトから出て来た時に成就した。神が御名を置くために選ばれた都エルサレムに神の聖所があることを嫉妬し、ヤロブアムは、本来エルサレムでのみ行われるように定められていた聖所、祭司職、礼拝の制度を偽の形で設けることに着手した。北の十部族に偽りの礼拝制度を築き上げたヤロブアムの行為は、アロンと金の子牛の反逆に直接対応するものであり、それゆえ、間もなく到来する日曜法だけでなく、1863年の反逆にも、もう一つの証しとなる。

ヤロブアムは心の中で言った。「今や王権はダビデの家に戻ってしまうだろう。もしこの民がエルサレムの主の家に上っていけにえをささげるなら、この民の心は再びその主人、すなわちユダの王レハブアムに向き、彼らは私を殺して、再びユダの王レハブアムのもとに帰ってしまう。」そこで王は相談し、金の子牛を二頭作って民に言った。「あなたがたがエルサレムに上って行くのは大変だ。イスラエルよ、見よ、これがあなたをエジプトの地から導き上ったあなたの神々だ。」彼は一つをベテルに据え、もう一つをダンに置いた。このことは罪となった。民はその一つの前で拝むために、ダンにまで行ったからである。彼は高き所のための家を造り、レビの子孫ではない民のうちの最も卑しい者たちを祭司に任じた。ヤロブアムは第八の月の十五日に、ユダにある祭りに似た祭りを制定し、祭壇でいけにえをささげた。彼はベテルでもそのように行い、自分が作った子牛にいけにえをささげ、また自分の造った高き所の祭司たちをベテルに配置した。こうして彼は、第八の月の十五日に、すなわち彼が自分の心で考え出して定めたその月に、ベテルで自分が造った祭壇の上でいけにえをささげた。彼はイスラエルの子らのために祭りを制定し、祭壇でいけにえをささげ、香をたいた。列王記上12:26-33。

ヤロブアムの反逆は、アロンの反逆、1863年におけるプロテスタントの角の反逆、そして間もなく到来する日曜法における共和党の角の反逆に重ね合わせることでできる、もう一つの真理の筋道を与え、そのことによって預言的証言を広げる。アロンの金の子牛の反逆において、主は祭司職の選任に関する定められていた方法を変更された。

反逆の前は、どの部族の長子も祭司職の一員となることになっていた。しかしアロンの金の子牛の反逆において、モーセの側に立ったのはレビ族だけであった。このため神は祭司職に就く者を選ぶ定めを変え、それ以後はレビ族だけが祭司職を担うことになった。

モーセは民が裸であるのを見た（アロンが彼らを、敵の前で恥となるほどに裸にしてしまっていたからである）。そこでモーセは宿営の門に立って言った。「主につく者は誰か。わたしのもとに来よ。」するとレビの子らは皆、彼のもとに集まった。彼は彼らに言った。「イスラエルの神、主はこう仰せられる。各々、腰に剣を帯び、宿営の中を門から門へと出入りして、各々、その兄弟を、その友を、その隣人を殺せ。」レビの子らはモーセの言葉どおりに行い、その日、民のうちからおよそ三千人が倒れた。出エジプト記 32:25-28。

アロンの反逆の際に神がレビ族から新しい祭司職を立てられたという御業を、ヤロブアムはまがい物にした。というのも、彼は「民のうち身分の低い者を祭司とし、彼らはレビの子らではなかった」からである。北の十部族の王国の始まりに起こった反逆は、アロンと踊り狂った愚か者たちの反逆と並行している。その反逆は、王国が打ち立てられると約束した預言の成就として、エジプトを出た後に起こった。いずれの場合にも新しい祭司職

が設けられ、それはそれまでの祭司選出の秩序からの変更であった。

アロンの金の子牛の背信は繰り返されたが、ヤロブアムによってそれは倍になった。彼は金の子牛を二つ作り、それを二つの町に据えたからである。ダンの町は、ダンが「裁く」を意味することから統治術を表し、ベテルの町は、ベテルが「神の家」を意味することから教会政治を表す。その金の子牛はアロンの子牛と同じ象徴性を持っていたが、二つの町が象徴する政教一致の証しを加えられていた。子牛は異教のいけにえの最上位であり、したがってキリストのいけにえを模倣した偽りのいけにえを表す。金はバビロンの象徴であり、子牛は獣の像であった。アロンが偽りの礼拝日を制定したように、ヤロブアムも祭りを制定し、その祭りの日取りがエルサレムでの真の礼拝の時と一致しないようにした。

やがて来る日曜法のあらゆる要素は、ヤロブアムの反逆の証しの中に象徴されている。すなわち、偽りのいけにえ（子牛）、偽りのキリスト（祭壇）、獣の像（教会と国家の結合）、偽りの礼拝日（日曜日）、そして偽りの祭司職である。

古代イスラエルの始まり、北の十部族が王国として成立した当初、そしてアドベンティズムの始まりは、いずれも同じ預言的要素を備えており、総合すると、間もなく到来する日曜法の預言的要素を示している。古代イスラエルはエジプトの奴隷状態から出て来た。ヤロブアムはソロモンの迫害を逃れて身を寄せていたエジプトから出て来た。そしてミラー派アドベンティズムは、ちょうど教皇制の束縛から抜け出したところであった。

レビの祭司職はアロンの反逆のときに確立され、最も卑しい者たちによる偽りの祭司職はヤロブアムの証しによって打ち立てられ、そして主がミラー派アドベンティズムと契約を結ばれたとき、ペテロによれば、ミラー派は「選ばれた世代、王なる祭司、聖なる国民、特別な民であって、あなたがたを暗闇からその驚くべき光へと召し出した方の誉れを宣べ伝えるための者」であった。ミラー派が召し出された光は、ハバククの一の板に表されたミラーの宝石の光であり、それはアロンの反逆の歴史において十戒の二枚の石の板によって型示されていた。彼らが呼び出された暗闇とは、教皇支配の暗黒時代であり、それはエジプトの奴隷的束縛の暗闇によって型示されていた。

キリストは、異教と教皇主義の双方によって踏みにじられていた宮を、1798年から1844年までの46年間で建て直した。彼が宮を建て上げたとき、契約の使者として、1844年10月22日に突然ご自分の宮に来られたのは、踏みにじられ破壊されていた宮を建て直し、またレビ族に代表される祭司職をも清めたからである。

しかし、彼の来る日をだれが耐えられようか。彼が現れるとき、だれが立っていられようか。彼は精錬する者の火のようであり、洗濯する者の灰汁のようである。彼は銀を精錬し清める者として座し、レビの子らを金や銀のように精錬して清め、彼らが主に義のささげ物をささげるようにする。そのとき、ユダとエルサレムのささげ物は、昔の日々のように、いにしえの年々のように、主に喜ばれるものとなる。マラキ 3:2-4。

1844年10月22日、キリストは突然ご自分の宮に来られ、レビ人の祭司職によって表されていた民と契約を結ばれた。ところが1863年までに、彼らはアロンの反逆を繰り返し、ミラー派の祭司職は、民のうち最も卑しい者たちからなるヤロブアムの祭司職と、アロンの踊る愚か者たちによって表されるラオデキヤの祭司職へと移行した。それでも、ヤロブ

アムの反逆の証言は、1863年の反逆に関するさらに大きな証言でもある。ヤロブアムが偽りの礼拝制度を創始したとき、エルサレムからひとりの預言者が遣わされてヤロブアムの反逆を戒めたが、これは、ミラー派アドベンチズムが十戒の安息日を休息の日として受け入れるよう導かれたことに象徴されている。

アドベント主義が第三天使の光と聖所を受け入れたとき、それらは、1798年に始まった「終わりの時」における封印の解明によって増し加わる光を退けたプロテスタントたちへの戒めとなった。古代イスラエルがエジプトの奴隷状態の中で安息日を忘れていたように、1798年に至るまでには、荒野の教会も安息日を忘れていた。ミラー派によってもたらされた審判の時のメッセージの増し加わる光は、最終的に聖所と神の律法へと導いた。

その光は1844年10月22日に到来し、カトリックの誤った教義から完全に離脱するようにと召された人々に対する、偽りの礼拝への叱責を示していた。太陽崇拝は、カトリックのもとに戻った諸教会に対するカトリックの権威のしるしである。その叱責は、ヤロブアムが偽りの礼拝制度を樹立した際に表されている。

ヤロブアムは第八の月、その月の十五日に、ユダにある祭りにならって祭りを制定し、祭壇の上でいけにえをささげた。彼はベテルでも同じことを行い、自分が作った子牛にいけにえをささげ、また自分が設けた高き所の祭司をベテルに据えた。こうして彼は、第八の月の十五日に、すなわち彼が自分の心に思い立って定めたその月に、ベテルで自分が作った祭壇の上でいけにえをささげ、イスラエルの子らのために祭りを制定し、祭壇の上で香をたいた。すると見よ、主の言葉によってユダから一人の神の人がベテルに来た。ヤロブアムは香をたこうとして祭壇のそばに立っていた。彼は主の言葉によって祭壇に向かい叫んで言った。「祭壇よ、祭壇よ、主はこう仰せられる。見よ、ダビデの家に一人の子が生まれる。名をヨシヤという。その者は、お前の上で香をたいている高き所の祭司たちを、お前の上でいけにえとしてささげ、人の骨がその上で焼かれる。」その日、彼はしるしを示して言った。「これが主が語られたしるしだ。見よ、祭壇は裂け、その上にある灰はこぼれ出る。」ベテルでその祭壇に向かって叫んだ神の人の言葉を王ヤロブアムが聞いたとき、彼は祭壇から手を伸ばして「その者を捕らえよ」と言った。

彼に向かって差し伸べたその手は干からびてしまい、もはや自分のもとに引き戻すことができなかった。祭壇も裂け、灰が祭壇からこぼれ出た。これは、主の言葉によって神の人が示したしるしのおりであった。王は神の人に答えて言った。「どうか今、あなたの神、主の御顔に取りなして、私のために祈ってください。私の手が再び元に戻るように。」神の人が主に嘆願すると、王の手は再び元どおりになり、以前のようになった。王は神の人に言った。「私の家に来て、身を休めてください。私はあなたに報いを与えよう。」しかし神の人は王に言った。「たとえあなたが家の半分を私に与えても、私はあなたと一緒に入らず、この場所ではパンも食わず、水も飲みません。主の言葉によって、『パンを食べるな。水を飲むな。来た道と同じ道を通って戻るな』と私に命じられているからです。」こうして彼は別の道を行き、ベテルに来た道を通って戻らなかった。列王記上12章32節-13章10節。

アロンとヤロブアムの証しにおける金の子牛の反逆に加え、ヤロブアムが定めた偽りの礼拝制度の実際の発足も、彼の証しの中に含まれている。その発足は、エルサレムで行わ

れるべき礼拝と、ヤロブアムの偽りの礼拝制度との区別を表している。1798年から1844年にかけて、主はご自分の民を、教皇支配の闇から、黙示録14章の三天使に象徴される驚くべき預言の光へと導き出された。プロテスタント諸教会はその光を拒み、そのことによって1844年にカトリックの娘たちとなった。

ヤロブアムの礼拝は、カトリックの礼拝体系を象徴していた。彼の物語では、イスラエルの北王国は、ミラー派の歴史におけるプロテスタントたちがとどまることを選んだカトリックの偽りの体系を表している。その体系の象徴は太陽崇拝である。

1844年10月22日に至聖所に入った忠実で賢いおとめたちは、カトリックの影響下に戻ってローマの娘たちとなったばかりのプロテスタントへの叱責を表していた。ヤロブアムの偽りの礼拝制度が発足したとき、ユダから一人の預言者が来てヤロブアムを戒めたが、それは至聖所に入り、神の律法を認めるよう導かれた忠実なおとめたちを型どっていた。その預言者と彼のヤロブアムへの戒めの物語は、1863年の反逆を考察するうえで非常に示唆に富む。しかしその物語は、始まりとともに終わりが据えられるまで、語るのを待たねばならない。

古代イスラエルの始まり、ヤロブアムの王国の始まり、そして現代イスラエルの始まりは互いに一致しており、間もなく到来する日曜法の時に、黙示録13章の地から上ってきた獣の終わりを示す三つの証しとなっている。1844年10月22日、ミラー派アドベンチズムの忠実な者たちは、地から上ってきた獣の真のプロテスタントの角となったが、それは1798年の終わりの時に始まった歴史の中でのことであった。1798年は、聖書予言における第六の王国であるアメリカ合衆国の始まりであり、また、アメリカ合衆国においてアドベンチズムの真のプロテスタントの角が確立された時でもあった。その始まりの歴史はアメリカ合衆国の終わりの歴史を表している。というのも、イエスは常に、物事の終わりをその始まりによって例証しておられるからである。

古代のイスラエル、現代のイスラエル、そしてヤロブアムのイスラエルという三つの始まりの証しは、地の獣の終わりを示している。しかし、ユダから来てヤロブアムを戒めた預言者の証しを展開するに先立ち、あらかじめ位置づけておくべきもう一つの結末がある。含めるべきその終焉の歴史とは、預言者エゼキエルにおいて示されるイスラエルの北王国と南王国の終わりである。

私たちが今示しているのは、1863年の反逆がエゼキエル書第八章の第一の忌むべきもの、すなわち「ねたみの像」によって特徴づけられているということであり、このことを忘れてはならない。エゼキエルが示す北王国と南王国の終焉を取り扱えば、1863年の反逆がアロンとヤロブアムの反逆によって象徴されていること、そしてそれがラオデキア的アドベンチズムの四世代のうち第一の世代の始まりを指し示していることを支持するのに、十分すぎるほどの証拠が得られるだろう。

次回の記事でこの研究を続けます。

主のことばが再び私に臨んで言った。「さらにこうだ。人の子よ、一本の棒を取り、その上に『ユダのために、そして彼の仲間であるイスラエルの子らのために』と書け。次にもう一本の棒を取り、その上に『ヨセフのために-すなわちエフライムの棒-そし

て彼の仲間であるイスラエルの全家のために』と書け。それから、それらを互いに合わせて一本の棒にせよ。あなたの手のうちで一つとなるであろう。あなたの民の子らがあなたに、『これらによってあなたは何を意味しているのか、私たちに示してくれないのか』と言うとき、彼らに言え。『主なる神はこう言われる。見よ、わたしはエフライムの手にあるヨセフの棒と、彼の仲間であるイスラエルの諸部族を取り、それらを彼と-すなわちユダの棒と-共に合わせ、彼らを一本の棒にし、彼らはわたしの手のうちで一つとなる。』あなたが書きつけた棒は、彼らの目の前であなたの手のうちにあるであろう。さらに彼らに言え。『主なる神はこう言われる。見よ、わたしは彼らが行ってしまった異邦の民の中からイスラエルの子らを取り、四方から彼らを集め、彼らを自分たちの地へ連れ帰る。』」

わたしは彼らを、イスラエルの山々にある地でひとつの国民とし、ひとりの王が皆の王となる。彼らはもはや二つの国民ではなく、二つの王国に分けられることも、もはや決してない。彼らはもはや偶像によっても、忌むべきものによっても、いかなる背きによっても自らを汚すことはない。わたしは彼らを、彼らが罪を犯したすべての住まいから救い出し、彼らを清める。こうして彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。わたしの僕ダビデが彼らの上に王となり、彼らはみなひとりの牧者を持つ。彼らはまたわたしのさばきに歩み、わたしの掟を守り、これを行う。彼らは、わたしの僕ヤコブに与え、あなたがたの先祖が住んだその地に住む。彼らも、その子らも、その孫たちも、永遠にそこに住む。わたしの僕ダビデが、永遠に彼らの君となる。さらに、わたしは彼らと平和の契約を結ぶ。これは彼らとの永遠の契約となる。わたしは彼らを住まわせ、彼らを増やし、わたしの聖所をとこしえに彼らのただ中に置く。また、わたしの幕屋は彼らと共にあり、わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。わたしの聖所がとこしえに彼らのただ中にあるとき、諸国の民は、主であるわたしがイスラエルを聖別することを知る。エゼキエル書 37:15-28。